

【出品目録】 令和5年度 収蔵品展「春の書画」

別館 1 階 展示室

	作者	作品名	制作年	材質・技法	備考
1	上田 菊明	直弧紋	1992年	絹本、糸・刺繍	令和5年度新収蔵資料
2	上田 菊明	鳩紋弧線鞆	1994年	絹本、糸・刺繍	令和5年度新収蔵資料
3	上田 菊明	羽縄眼紋	2001年	絹本、糸・刺繍	令和5年度新収蔵資料
4	上田 菊明	巡る季節 Part II	1991年	絹本、糸・刺繍	令和5年度新収蔵資料
5	ジョルジュ・ブラック	花籠		紙・エッチング	中河与一コレクション
6	井上三綱	未詳(花)	1975年	紙・水彩	
7	奥村 土牛	早春の富士		紙・リトグラフ	中河与一コレクション
8	奥村 土牛	チューリップ図			中河与一コレクション

別館 2 階 展示室

	作者	作品名	制作年	材質・技法	備考
9	狩野 探溟	山上船之図		絹本着色	
10	柳 溪	竹雀図		紙本墨画	
11	諸葛 監	花鳥図		絹本着色	
12	狩野 探溟	辰	1916年	紙本墨画	
13	良寛	なべて世は		彩箋墨書	中河与一コレクション
14	鴨居道	薄墨桜	19387頃	彩箋墨書	中河与一コレクション
15	若山牧水	春の夜の	1910年頃	紙本墨書	中河与一コレクション
16	保田与重郎	みわ山の	1934年	彩箋墨書	中河与一コレクション

関連資料（2階のぞきケース）

	作者	作品名	制作年	材質・技法	備考
20	中河 与一	『天の夕顔』自筆原稿(複製)		インク・原稿用紙	2階のぞきケース
21	中河 与一	『天の夕顔』仏訳版(ドノエル社)	1952年	紙・印刷	2階のぞきケース
22	中河 与一	『天の夕顔』スペイン語版	1978年	紙・印刷	2階のぞきケース
23	中河 与一	『決定版 天の夕顔』	1986年	紙・印刷	2階のぞきケース
24	中河 与一	『足と煙草』自筆原稿		インク・原稿用紙	2階のぞきケース
25	中河 与一	『足と煙草』	1982年	紙・印刷	2階のぞきケース
26	中河 与一	『愛恋無限』自筆原稿		インク・原稿用紙	2階のぞきケース
27	中河 与一	『愛恋無限』	1936年	紙・印刷	2階のぞきケース

展示室内での写真・動画の撮影はご遠慮ください。

【発行】小田原市郷土文化館
〒250-0014 小田原市城内7-8
0465-23-1377

新しい年がはじまりました。本年最初の展示は、収蔵資料のなかから、春にふさわしい書画を厳選し、ご紹介します。

小説「天の夕顔」で知られ、晩年を小田原・板橋で過ごした小説家・中河与一（1897-1994）は、若い頃から芸術に親しみ、自ら創作するとともに、交流のあった画家や小説家・詩人らの作品を収集しました。今回ご紹介する作品の多くは、中河と交流のあった人物によるものです。

小田原生まれの絵師・狩野探溟（1849-没年不明）は、安土桃山から江戸時代にかけて長く徳川將軍家の御用絵師として活躍した狩野派の正統を継いだ絵師です。美術史上でのビックネームではありませんが、「武者絵」などで高い評価を得ています。

春の情景を詠んだ詩歌をしたためた書、新春にちなんだ、あるいは季節の草花を描いた作品から、春の訪れを感じていただけると幸いです。

また、本展では、本年度小田原市が受贈し、新たに当館の収蔵資料となった足柄刺繍作家上田菊明氏（1932-）の作品4点を公開します。上田氏によって生み出される「足柄刺繍」の世界をぜひご堪能ください。

いのうえ きんこう

井上 三綱（1899～1981）

画家。明治32年（1899）福岡県に生まれる。大正10年（1921）小学校教諭として横浜に赴任。昭和元年（1926）第7回帝展に「牛」が初入選し、以後、帝展に7回入選。昭和3年（1928）小田原市酒匂に移る。昭和25年（1950）第4回美術団体連合展に出品した「しゃがみかけた牛」をイサム・ノグチが賞賛し、海外でも評価される。昭和27年（1952）小田原市入生田に転居、アトリエを構え、永住する。

油彩・水彩・墨・顔料を用い、切り紙などを組合せ、研ぎ出し・ひっかきなどの技法を混合した独自の表現を確立した。

うえだ きくあき

上田 菊明（1932—）

刺繍作家。幼少期から家業の「縫箔」（ぬいはく）の仕事を手伝い、15歳の頃より制作を手掛ける。昭和30年頃に産業としての縫箔は衰退するが、技法を継承し、「足柄刺繍」と名付け、現代に伝える。糸の染色・図案の作成・糸を刺すという全ての工程を自身で行なう。1996年「小田原市民功労賞」受賞。2004年、ユリジョン現代美術世界展（ドイツ）「ハンディクラフト賞」、2005年、パリ国際サロン（パリ・古文書美術館）「特別賞」を受賞するなど、その高い技術に支えられた作品は、伝統工芸の枠を超えて美術作品として高い評価を得ている。

おくむら とぎゅう

奥村土牛（1889—1990）

日本画家。明治22年（1889）東京・京橋に生まれる。本名は義三（よしぞう）。16歳で梶田半古塾に入門、のちに小林古徑に師事。雅号の「土牛」は、丑年生まれの子に因み、中国寒山詩の中の「土牛石田を耕す」から命名したもの。昭和2年（1927）院展に「胡瓜畑」が初入選。昭和7年（1932）同人に推挙され、昭和15年（1940）日本芸術員会員、昭和53年（1978）日本美術院理事長となる。花鳥、人物、風景など対象は幅広いが、篤実で深く温かみのある観照の姿勢は一貫していた。昭和33年（1958）文化勲章受賞。

ジョルジュ・ブラック（Georges Braque, 1882—1963）

フランスの画家。フォーヴィスム（野獣派）に影響を受けた作品で画壇に登場したが、1907年ピカソ・パブロと知り合い、同一の対象を様々な角度から見て一枚の画面に描き込むという絵画の手法である「キュビスム運動」を共同で創始する。第一次世界大戦に従軍後、キュビスムの抽象的な手法を用いつつ静物画なども多数制作した。1937年カーネギー国際美術大賞受賞後、国際的な名声を得て、20世紀最大の巨匠として知られる。

かのう たんめい

狩野探溟 (1849-1922)

画家。炭焼きを家業とする加藤家の長男として、小田原の早川に生まれる。生来絵を描くのが好きで、14歳の頃から本格的に師について絵を学んだ。最初の師は小田原藩の絵師・岡本秋暉、次に、樋口探月の元で修業。明治13年(1880)より大蔵省印刷局彫刻課に勤務し、多くの紙幣用の肖像画を描いた。明治18年(1885)く江戸幕府の御用絵師狩野四家の一つであった鍛冶橋狩野の十代目狩野深美(名は守貴)の画塾に入門し、「探溟斎守貞」として活躍。明治20年(1887)には東京府工芸品共進会に入選。特に濃彩で仕上げた武者絵を得意とした。

かもいみち

鴨居道 (1903-1989)

香川県出身の書家。調和体(漢字かな交じり)による創作で有名。出品作は、岐阜県本巣(もとそう)市にある中河与一の歌碑に刻印された「薄墨桜(うすずみざくら)」の歌を鴨居道がしたための書である。

りゅうけい

柳溪 (1855-1935)

画家。岸浪柳溪(本名:静司)。仙台藩士の医師の三男として、江戸に生まれる。4歳の時、風疹と麻疹により聴力を失う。10歳頃から5年間仙台に住み、藩の儒者・大槻磐溪に漢学と書法を、藩の画員・東東葉に絵を学んだ。10代後半より福島柳圃、田崎草雲に師事。金沢や京都、群馬などで修業に励んだのち、金沢に定住し画業に専念した。伝統的な南画の作風を継承する一方で富士山の画も得意とした。

しかつかん

諸葛監 (1717-1780(90))

江戸出身の南蘋(なんびん)派絵師。享保年間(1716-38)に長崎に渡来した清の沈南蘋の系統を伝えた日本画の一派であるが、諸葛監は長崎へ遊学せず、中国古画や沈南蘋の作品を集めるなどして独学した。花鳥図を得意とし、中国画に忠実かつ細部にこだわった作風が多い。諸葛という画姓は、当時来日した清時代の画家、諸葛晋に私淑したことに由来すると考えられている。

りょうかん

良寛 (1758-1831)

江戸時代の禅僧・詩人・歌人・書家。越後(新潟県)、出雲崎の名主橘屋、山本家に生まれる。18歳の頃に出家すると、22歳で曹洞宗円通寺(岡山県)の国仙和尚に従い得度。本格的な仏道修行に入る。諸国を行脚し、生涯寺を持たず、故郷の国上山の五合庵に隠棲した。また、多くの和歌や漢詩を読み、優れた書の作品を残している。

やすだ よじゅうろう

保田与重郎 (1910-1981)

奈良県生まれの作家、文芸評論家。古典に精通し、東京帝国大学を卒業後、1935年(昭和10)に亀井勝一郎らとともに文芸雑誌『日本浪漫派』創刊。左翼リアリズムの克服や近代批判を支柱として、日本古典美の回帰、高揚に求めようとした。(同誌は昭和13年に廃刊。)第二次世界大戦中、一貫して戦争を正当化したため、戦後公職追放となるが、昭和24年雑誌『祖国』を創刊。『日本の橋』(1936年)など、多数の著作を刊行した。

わかやま ぼくすい

若山 牧水 (1885-1928)

歌人。宮崎県の医者之家に生まれる。本名:繁。宮崎県立延岡中学校に入学する頃、短歌と俳句を始める。18歳のとき、号を「牧水」とする。1904年(明治37)早稲田大学文学科に入学。同級生の北原白秋、中林蘇水と親交を結ぶ。早稲田大学卒業後に、第一歌集「海の声」を自費出版する。社会や流行に流されない自然主義文学の歌は文学界に大きな足跡を残した。1911年(明治44)、詩歌雑誌「創作」を主宰。1920年(大正9)、東京から静岡県沼津市に転居。1928年(昭和3)病のため逝去。43歳という短い生涯ながら、9,000首(未発表含む)もの歌を残している。